

隔離中でも授業工夫

太田 晴子さん

十日町市出身



from 北京

日本の隣国でありながら、私の意識の中では「異国」だった中国。何をすることも新型コロナウイルスが行く手を阻み、困難が伴いました。

中国に着いても、まずは北京から離れた大連で21日間の隔離生活を送り、健康が証明されないと北京に入ることが許可されません。隔離生活中もオンライン授業が行われ、私は小学3年生から中学3年生までの音楽を担当しました。オンラインでは対面授業の半分ほどしか内容を伝えることができませんが、大連での試行錯誤はその後の授業づくりや子どもとの関係づくりにプラスの効果がありました。

北京の生活は毎日が驚きの連続です。その一つが携帯電話の「威力」です。ここでの生活はWeChat(ウイチャット)というアプリに各自の携帯番号がひもつけられ、個人情報が一括管理されています。現金は日常生活でほとんど使わず、携帯で決済をします。さらには、そこに健康情報が登録された「健康宝」というアプリが連動していて、ワクチン接種履歴やPCR検査の結果も分かるようになっていきます。公共施設に入る時は、携帯電話で「健康カード」の提示と検温を行いますので携帯電話なしで外出はできません。

中国は「ゼロ・コロナ」の徹底した政策がとられています。夏休みや国慶節などの長期休暇があると感染者が増加します。10月下旬から保健師を市内全ての学校に派遣し、児童生徒と教職員にPCR検査を実施しています。急な対応を求められることも多いのですが、市民はそれを理解して実行しています。

在外教育施設では転出入が多く、隔離施設からオンラインで参加する児童生徒がいるので、画面上の仲間と関わりながら一緒に学ぶことが彼らの日常になっています。試行錯誤が続いていますが「いつもやっている活動なので、安心して取り組むことができた」という生徒の言葉にほっとし、次へのパワーをもらっています。

これからも、周りの教職員と息を合わせて、教育活動に取り組んでいきます。(太田さんは1972年生まれ。新潟大卒業、新潟大学院修了後にドイツに渡る。2012年教員採用。県立小出特別支援学校在籍。4月から北京日本人学校で勤務しています)



うっすらと雪化粧した北京日本人学校

◇おとわり 次回の掲載は来年2月7日付の予定です。